

0. シルヴィオ・ダルツォー Silvio D'Arzo (1920–1952)

イタリアでも知る人の少ない作家。代表作はエウジェニオ・モンターレに「完璧」と評された『他者の家 *Casa d'altri*』(死後出版)。この作家はときに「異端の作家 scrittore irregolare」と評されるが、では彼のこの「異端性」とはどのようなものなのか？

1. 時代背景—ファシズムと Kommunismus

リソルジメント以来、近代化の遅れたイタリアが抱えることになった<統一国家>としてのアイデンティティという問題。この視点からみると、相互に敵対するものとして現れたファシズムと Kommunismus (イタリア共産党) が、みずからを「語る主体/作者」として設定し、それ以外の視点を排除しようとしたという点において実際には同じ性質をもっていたということ

<物語的自己同一性 *identità narrativa*> (リクール)

「主体は、彼が自分について自分に語る物語において自己認識する」

- ・ファシズム：帝国主義と古代ローマ (cfr. 「ファシズムの物語・物語のファシズム」)
- ・イタリア共産党：革命とレジスタンス

PCI がみずからの<歴史/物語>として独占しようとしたレジスタンスは、同時にネオレアリズモの起源ともなったということ。ではレジスタンスとはどのような経験だったのか？

2. 同時代の文学の潮流—ネオレアリズモ

<ネオレアリズモの特徴>

「新たな語りを実現する可能性」(コルティ)

- ・パルチザンに部隊における社会階層の混交
- ・ある個人の経験が、部隊から部隊へと口伝えで広まってゆくことで間をおかずして集団によっても共有されたということ

⇒その具体的な方法論としての「地方主義」「方言主義」

(=ファシズム的な<偽りの統一性>への反発)

- ・雑誌『ポリテクニコ』
- ・「さまざまなイタリアの多様性」(カルヴィーノ)

<ネオレアリズモ終焉の理由—<物語的自己同一性>が抱えるジレンマ>

- ・イタリア共産党の権威主義：ヴィットリーニ・トリアッティの文化路線論争 (46年)
- ・さまざまな多様性が統一を欠いたばらばらなままの状態：48年の総選挙におけるイタリア共産党の敗北

3. ダルツォが語る物語—ネオレアリズモ批判

「偽りに陥る道筋がいくつもあるとしたら、もっとも確実に逃げ道がないのは真実の深奥に歯を突き立てようと望むことだ」

「時として、あるものとその正反対のもの以上に似通ったものがない場合もある」

ではダルツォはどのような物語を語ろうとしたのか？

< *Ragazzo d'altri tempi* >

戦後ダルツォが書こうとしながら、結局未完に終わった作品。語り手が現在の地点から、自分の幼年時代を語るという構造をもつ。

物語冒頭、語り手は外部から切断された、内部だけの世界（＝言語によって主・客が分かたれる前の世界）に生きている。その世界に訪れようとする闖入者としての弟。この弟の誕生を阻止すべく語り手はさまざまな画策をし、神に向けて祈りさえする。

結局弟は流れてしまい生まれてこない。自分が祈りによって弟を殺したのだと信じる語り手は、それから先、自分の内部に誰かの声を聞き取るようになり、それは死んだ弟のものなのだと考える。この声の存在は語り手の罪責感を深めるが、それと同時に彼にそれまで想像もしなかった世界の素晴らしさを教えてもくれる。

物語の最後、語り手は墓地にいる。そこで弟のために祈りを捧げるが、祈りは受け入れられない。生まれてくることのなかった弟を、罪責感とともに記憶にとどめ続け、その記憶とともにこれからの日々を生きていくと約束することで初めて祈りは聞き入れられ、語り手は許しを得る。

- ・「わたし」という発話において、主体と客体のあいだに境界線がひかれることで主体が生まれる瞬間に向けられる視線。言語とは人と人を結ぶものであるより前に、主・客を分離するものであるという考え。そこには常に排除されるものがある（アイデンティティに内在する分裂）。これは集団のレベルでも同様。「わたしたち」と言うためには、そこから排除される第三項がなくてはならない。レジスタンスで言えば、ファシズム・ナチズムがその第三項の位置を占めていた。ネオレアリズモが< 集団的単数 *un singolare collettivo* >に到達できなかったのは、子の排除に目を向けず「わたし」と「わたし」が出会うところに「わたしたち」が形成されると純真にも信じたから
- ・個人にせよ集団にせよ、< 物語的自己同一性 >のジレンマに陥ることなく< 集団的単数 >を形成するためには、約束とともに、自分（たち）が排除したものを記憶に留めることによって現在を更新し続けなくてはならない

⇒< 遂行的言表 >は、それを通して形成される主体に責任を課すと同時に、それが行為として認識されるために常に権威を必要とする（バンヴェニスト）

⇒< 物語的自己同一性 >の不安定性を克服する唯一の手段は「倫理的責任」である（リクール）

4. 結論

<ダルツォの異端性>

ダルツォの異端性は、同時代の潮流ネオレアリズムと比べて異質であったという意味だけではない。あらゆる主体は排除なしでは形成されえないことを自覚しつつ、それでもなお「わたし」として語る可能性を思考し、そこから「わたしたち」へと辿り着く道を模索した彼にとっては、あらゆる規範や権威のように、固定され疑いえない単一性として自らを措定するものは受け入れがたかっただろう。ダルツォの異端性 *irregolarità / eresia* はこうした意味において解されなくてはならない。

<その後のダルツォ>

60年代以降の、いわゆる構造主義の理論家たちによる<作者 *autore*>の正当性を巡る議論。固定された主体という考えに対する批判から出発するこの議論は、排他的な統一性に陥ることなく物語ることはいかにして可能かと問うことでもある。この問いに対するひとつの頂点はカルヴィーノの『冬の夜ひとりの旅人が』だろうが、ダルツォもまた、*Ragazzo d'altri tempi* 以降、というよりその生涯を通して同じことを模索していたと言える。いくつもの異名を発明しながら、「物語的自己同一性」をその身で生きた彼にとっては、自らの人生そのものがくり返し語りなおされるべき物語だっただろう。そんな彼が、死の間際まで書き連ね続けた遺作において、選択しようとしていた異名が「20世紀の無名者 *Ignoto del XX secolo*」だったという事実は、その目指したものが何だったのかを理解する助けとなるだろう

<参考文献>

Paul Ricoeur, *Tempo e racconto, volume 3*, trad. it. Jaca Book, Milano, 1988

Maria Corti, *Il viaggio testuale*, Einaudi, Torino, 1978

Italo Calvino,

- *Prefazione 1964 al Sentiero dei nidi di ragno*, in *ROMANZI E RACCONTI volume I*, Arnoldo Mondadori, Milano, 1991

- *Se una notte d'inverno un viaggiatore*, in *ROMANZI E RACCONTI volume II*, Arnoldo Mondadori, Milano, 1994

Émile Benveniste, *Problems in General Linguistics*, University of Miami Press, 1971

ポール・リクール、『物語と時間【Ⅲ】』、久米博訳、新曜社、2006年

和田忠彦、「ファシズムの物語・物語のファシズム」、

『ファシズム、そして』所収、水声社、2008年

イタロ・カルヴィーノ、『冬の夜ひとりの旅人が』、脇功訳、筑摩書房、1995年

エミール・バンヴェニスト、『一般言語学の諸問題』、河村正夫ほか訳、みすず書房、1983年